

思い出写真館



昭和50年6月、岩手医大との練習試合にて、相手コーナーキックのボールをヘディングで跳ね返している医学部5年生の私（左から二人目）。

(財)広南会

広南病院

藤原

院長

悟



昭和24年に秋田県角館町で生まれた私は、夏は川で水泳や釣りをして遊び、冬には山でスキー滑りを楽しむというように、豊かな自然環境の中で活発な子供時代を過ごし、元気に成長しました。ごく普通のサラリーマンの家庭で育った私は、高校を卒業後、仙台で下宿生活をしながら商社マンを志し東北大学の経済学部に通います。下宿先の近くに医学部があり、医学祭に足を運んだ際に「ああ、こんな世界もあるんだなあ」と、漠然と考えたりしていたのですが、当時医学部には脳外科の世界的権威であった鈴木二郎先生がおられ、故郷の秋田が脳卒中による死亡者の数で常に全国上位にランキングされていたこともあり、次第に鈴木先生のご指導を仰ぎ、医療を通じて世の中に貢献したいという思いが強くなりました。そこで経済学部を卒業後、医学部の3年に転入して脳外科医を志すことに決めました。

思い出の写真は、転入後に入部したサッカー部の練習試合の風景を写した一枚です。秋田にいる頃にラグビーをしたことはあったのですが、サッカーの経験はありませんでした。入部の動機も、医学部に入った時にまわりに知り合いがひとりもおらず、馬が合いそうな友人を追いかけたただけでしたので、私はベンチウォーマーであることが多かったのですが、部活のお陰で学部に於ける人間関係がとても円滑になりましたし、OB会のメンバーとは今でも地元のプロサッカーチームの医療支援等

を通じて交流を続けています。

現在私が院長を務めている広南病院は、昭和23年に東北大学付属病院長町分院（外来施設）の入院施設としてスタートした病院ですが、当時大学病院には脳神経外科が無かった為、医学部の脳疾患研究施設（脳研）としての役割を兼ねておりました。私はここで鈴木先生を始めとする先輩医師等から大いに薫陶を受け、専門領域に於いて貴重な臨床経験を積む幸運に恵まれるのですが、同時に今もなお語り継がれる“長町脳研魂”と呼ばれる脳外科医としての精神訓というものもまた存分に叩き込まれることになりました。常日頃から職員達には病院は自分の家だと思い、常に感謝の気持ちを持って仕事に臨むよう指導をしています。また、日常診療のモットーとして、“患者さんには明るく・元気に・さわやかに接し、職員同士は楽しく・仲良く診療活動を行う”ことを掲げています。お陰様で当院は脳疾患専門病院として国内に於いて高い評価をいただいております。ベッド稼働率も常に9割を超えておりますが、大学病院に引けをとらない診療内容の実現を図り、地域医療のさらなる発展に貢献していきたいと考えています。趣味の海釣りに出掛ける時間が最近あまり取れていないのですが、心が和む唯一の時間の確保もまた、医師としての大切な努めなのかもしれません。